5ピクチャーズの可能性
―KCN 調査から―

5 Pictures and its Possibilities
― From the Results of KCN Interview Research ―

佐　藤　光　正
Kosei SATO

要約

現在、障害福祉を含む多くの領域では、多様性を尊重し地域をベースに利用者主体の共生社会をめざして支援が模索されているところである。ところが現在、目まぐるしく行われている制度改革は、制度理解をはじめ仕事の細分化や業務の複雑化を作り出し、その解決のためにまた様々な仕事が増え、さらに連携や重層的な支援の必要性と困難さが増すという悪循環に陥っているようにみえる。このような社会においては、物事をシンプルに捉えて共通の枠組みとして考える「汎用性」を共有しながら共通理解と情報共有を行うことを前提に、それぞれの「専門性」や置かれた「事情」「特性」を生かす支援が必要だと考える。

この論文では、これまでの筆者の障害者領域の相談支援における活動をとおして開発した「本人中心支援」を促す「5 ピクチャーズ」というツールの可能性について KCN[(1)]（かながわ障がいケアマネジメント従事者ネットワーク）へのインタビュー調査を基に考察を行う。「5 ピクチャーズ」は 5 つの問いで構成されるシンプルな構造をもつストレングス視点をベースにした、本人中心支援を行うための俯瞰図であり、サービス利用者とともに作れるシンプルな“見える化“ツールである。小さな知見ではあるが、このシンプルなツールが、本人を見失わずにストレングス視点を促し障害種別という垣根を越える支援に貢献したことを明らかにする。めざす地域共生社会の実現のためには様々な垣根を越える必要があるが、その際に「5 ピクチャーズ」が貢献できる可能性を探る。

Keywords：5 ピクチャーズ、ストレングス視点、本人中心支援、ケアマネジメント、地域共生社会
5 Pictures, strengths perspective, person-centered, community inclusive society

1．はじめに

現在、高齢者領域から導入された日本のケアマネジメントは、続く障害児者領域、また別の切り口からの生活困窮者領域において実施、推進され、さらに地域のあらゆる住民を対象とした『我が事・丸ごと』地域共生社会実現本部の創設など、制度面におけるサービス利用の仕組みとして拡がりを見せている。またそれらと併行して、それらの仕組みを動かす人材養成や使用するツールなどについても、それぞれ様々な試行錯誤が行われているところである。これらの一連の流れは、地域社会における人々の「生活」をいかに支援していくべきか、という大きな問いに収斂されるが、そのことに答えるのは筆者の力量を大きく超えている。地道な実践をとおしてめざしていきたい。

2．障害領域のケアマネジメント

(1) 日本の障害者ケアマネジメント

日本の障害者に対するケアマネジメントは、1995（平成 7）年に公益財団法人日本リハビリテーション協会が厚生省の委託を受けた「障害者に関する介護サービス等の提供方法及び評価に関する検討会」から始まる。その後、三障害（身体障害・知的障害・精神障害）が別々にケアマネジメントを検討することを経て、2000（平成 12）年に「障害者ケアマネジメント体制整備検討委員会」が発足し、2002（平成 14）年に『障害者ケアガイドライン（以下､ガイドライン)』が出され、三障害に共通するケアマネジメントの方向付けがなされた。筆者も委員として参加していたが、ガイドラインは“はじめに障害ありき”ではなく、“ひとり一人の支援計画を作成する”ということで障害特性の呪縛から逃れる理念を示した。

その後、2003（平成 15）年に導入された支援費制度により、利用者はサービス事業者との契約のもとに障害福祉サービスを利用することになり、障害者領域でもケアマネジメントを制度化する必要性が高まることになった。2005（平成 17）年に「障害者自立支援法」が制定され、2006（平成 18）年度から障害者ケアマネジメントが制度として実施されることになった。障害者ケアマネジメントは市町村が行う必須事業であり、都道府県知事の指定を受けた障害者相談支援事業者が新設され、ケアマネジメントを実施することになった。2012（平成 24）年度より市町村長の指定により特定障害者相談支援事業者と障害児相談支援事業

者がケアマネジメントを実施することになった。

「障害者自立支援法」の施行により、障害者領域にも制度としてのケアマネジメントが導入されることになったが、実際にはごく一部の利用者に限定されてしまった。そのため 2013（平成 25）年施行の「障害者総合支援法」では、障害福祉サービスを申請した障害者や障害児、地域相談支援を申請した障害者にケアマネジメントの対象が広げられ、2015（平成 27）年 3 月末までに障害福祉サービスを利用するすべての障害児者が利用することとなり、障害者領域でも本格的にケアマネジメントが実施されることになった。

（2）サービス等利用計画と個別支援計画との連携

障害児者に対する相談支援には、一般相談支援と特定相談支援の 2 つがある。前者は一般相談支援事業者が地域相談支援と基本相談支援を行い、後者は特定障害者相談事業者と障害児相談支援事業者が計画相談支援と基本相談支援を行う。ケアマネジメントである計画相談では、サービス利用支援と継続サービス利用支援を行い、利用者毎にアセスメントを行い「サービス等利用計画」を作成する。

特定障害者相談支援事業者と障害児相談支援事業者には、ケアマネジメントを実施する相談支援専門員が配置されている。一般相談支援事業者の地域移行支援や地域定着支援にも相談支援専門員が配置され、精神病院からの退院や障害者施設からの退所だけでなく、生活保護や司法領域での障害者の退所にも関わることになっている。ケアマネジメントを行う際には「個別支援計画」を作成する各サービス事業者との情報共有や連携をもとより、地域での共生社会をめざす様々な機関同士等との連携が重要となる。特にストレングス視点をベースに行うケアマネジメントについては、近年注目されているところであるが、白澤（2018）は、以下のような指摘をしている。

第一に、利用者のもつストレングスをアセスメントや支援目標の設定時に理解するには、利用者との間で相当の時間をかけて信頼関係を確立しておく必要があること、第二に、ケアマネジャーには、人は誰でも生来的にそうしたストレングスをもっているといった人間観なり価値観を有していることが求められ、あわせて、ストレングスを引き出す高度なコミュニケーション能力が必要とされる。

これは現行の月に 1 度ほどのモニタリングを行う相談支援専門員だけでは、ストレングスベースドのケアマネジメントの実施は難しいということになる。よりサービス事業者のレベルアップも含め、関係者の密な情報共有と連携のためのツールが今後の課題である。

3. 5 ピクチャーズという思考の枠組み

(1) ミスポジション論

介護保険が導入された頃、要支援者の身体介護からみた ADL を中心に生活課題を「できる／できない」で評価を行うアセスメントの流れに対して、カウンターカルチャーとして提唱したのが「ミスポジション論 [(2)]」という考え方である（2006, 佐藤）。これはよく知られている As is ／ to be [(3)] というフレームに似ているが、「ミスポジション論」は、“はじめに障害ありき”ではなく“常により良く生きたい”と願う人間の姿を根底に据え、あるべき理想の姿のイメージと現状のズレという人として共通な視点に立ち、対象者の“思い”を軸に事例理解をしようという試みである。例えば「地域で暮らしたい」と希望する人が、やむなく「施設で入所生活」をしていればそこをミスポジションと考え、「地域で暮らすにはどうするか」をともに考える。

ミスポジション論は、あるべき姿「良かれと思う（こうありたい）将来像や生活」と現状「現在の自分や生活」とのズレから対象者に寄り添い、思いや生活ニーズを捉え、障害支援カテゴリーを問わずに課題を外在化し、対象者とともにその解決策を考えることを意図したフレームである。

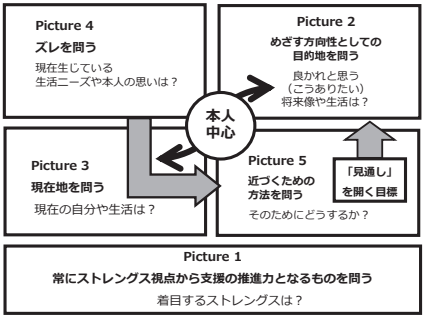

図１　５ピクチャーズの構造

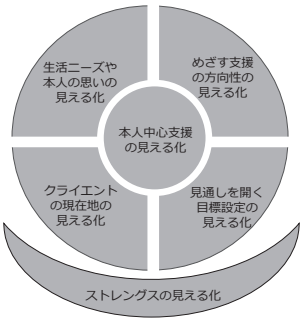

図２　５ピクチャーズの見える化

(2) 5ピクチャーズの構造

「5ピクチャーズ」[(4)]は、ミスポジション論をベースに、事例を“5つの問い”で「見える化」して捉えるためのフレームとして考案したものである（図1）。本人中心支援を見失わず、ストレングス視点（Picture1）の問い（着目するストレングスは[(5)]？）をベースに、

・Picture2：めざす方向性としての目的地[(6)]を問う（良かれと思う、こうありたい将来像や生活は？）

・Picture3：現在地を問う（現在の自分や生活は？）

・Picture4：ズレを問う（現在生じている生活ニーズや本人の思いは？）

※ Picture4では、本人の思いを捉えるために「100文字要約」[(7)]を活用する。

・Picture5：近づくための方法を問う（そのためにどうするか？）

※ Picture5では、「見通しを開く目標[(8)]」に焦点を当てた解決策を対象者とともに考える。

(2) 5ピクチャーズが促す「見える化」

相談支援業務遂行の多くは協働作業である。そのためにはサービス利用者と支援者たちがともに共有できる「見える化」を工夫することが必要である。自分一人で見ることのできる範囲は限られている。そして「見える化」の基本は、相手の意思にかかわらず、さまざまな事実や問題が「目に飛び込んでくる」状態をつくり出すことであり、良い「見える化」は、「気づき」「思考」「対話」「行動」を育む。(遠藤, 2005)。

5ピクチャーズを「見える化」の視点から見ると、中心に位置するのは、

①本人中心支援の見える化である。他に以下の「見える化」を促す。

②めざす支援の方向性の「見える化」

③クライエントの現在地の「見える化」

④生活ニーズや思いの「見える化」

⑤見通しを開く目標の「見える化」

4. KCN（かながわ障がいケアジメント従事者ネットワーク）調査

(1) 調査の概要

調査実施日：2022年1月15日

調査場所：ふじさわ基幹相談支援センターえぽめいく
調査内容：2006（平成 18）年度からの KCN での活動（神奈川県域）にて活用した「5 ピクチャーズ」というツールについて法人設立当初からの関係者（主なベースの支援領域として、身体障害領域 2 名、知的障害領域 3 名、精神障害領域 2 名）で振り返り、当時の縦割りの障害種別を越える課題のなかで同ツールが果たして役割について、またその取り組みから見える今後の地域共生社会の構築に向けた展開の可能性についてフォーカスグループを用いてインタビュー調査を実施した。
※駒澤大学「人を対象とする研究」に関する委員会承認

（2）調査結果

調査の結果①従来の支援、② 5 ピクチャーズを用いた支援、③ 5 ピクチャーズの可能性、以上 3 つのカテゴリーが抽出された。
（以下、【　】内はカテゴリー、＜　＞内は重要カテゴリー、「　」内はサブ重要カテゴリー、〔　〕内は重要アイテムとする。）

【従来の支援（表 1)】では、重要カテゴリーとして＜福祉全体の状況＞、＜身障･知的障害領域の支援＞、＜身体障害領域の支援＞、＜知的障害領域の支援＞、＜精神障害領域の支援＞が抽出された。
＜福祉全体の状況＞では､｢サービスが主人公｣が重要カテゴリーとして抽出され、「支援者が主人公」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。
＜身障･知的障害領域＞では、「障害に着目した支援」「問題行動に着目した支援」「教育訓練」「支援者の押し付けプラン」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。
＜身体障害領域の支援＞では、「医学モデルに基づく支援」「障害の理解が本人理解」「障害が主人公」「身体障害領域の研修」「安全・安心第一」「お堅いフォーマル支援」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。
＜知的障害領域の支援＞では、「うわべだけの権利擁護」「名前だけのストレングス」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。
＜精神障害領域＞では、「どんな人から入るアセス」「スーパーバイズ研修」がサブカテゴリーとして抽出された。

表 1　従来の支援

カテゴリー	重要カテゴリー	サブ重要カテゴリー	重要アイテム
従来の支援	福祉全体の状況	「サービス」が主役	サービスに繋げばいいという時代は終わった
			時代が「生きる」をどう支えるかのパラダイム転換した
		「支援者」が主人公	ケアする人とされる人という関係だった
	身障・知的障害領域の支援	「障害」に着目した支援	身障・知的のほうは「障害」が入り口だった
			サービスを使うためのアセスメントしてはビカイチだった
			サービスがあることで人生が豊かになったひともいる
		「問題行動」に着目した支援	問題行動やトラブルをどうしようかという発想だった
		教育訓練	できない1を2にするための支援だった
		支援者の「押し付け」プラン	押し付けられたプランだった
	身体障害領域の支援	「医学モデル」に基づく支援	はじめに「障害」があってどうするかという話になりやすかった
			アセスメントシートは医学モデルだった
			医学モデルのアセスメントだった
			ADL中心で「介助」「一部介助」「全介助」の話だった
			できるできないのチェックだった
			どれが問題で何が課題かだけを考えていた
			「何ができるんですか」からアセスが始まった
			ストレングス視点はなかった
			支援者目線で障害に特化した処遇方針だった
		「障害」の理解が本人理解	アセスメントシートは量が多かった
			見える化の工夫はなかった
			アセスメントシートは障害の枠組みを外しにくかった
		「障害」が主人公	本人が置いてけぼりだった
			心のこもらない利用者への機械的な説明しかできなかった
		身体障害領域の研修	暗くはないが疲れる緊張した研修だった
			見る気にならない受講者作成のアセスメントシート
			「障害」のアセスメントだけをどんどん深めた
		安全・安心第一	「何があったらどうする」だった
		お固いフォーマル支援	公的な社会資源しか考えられなかった
	知的障害領域の支援	うわべだけの権利擁護	「権利擁護」と言っていたがやっていることは真逆だった
		名前だけのストレングス	「ストレングス」はあたり前と言っていただけでやっていなかった
	精神障害領域の支援	「どんな人」から入るアセス	「この人どんな人」と障害じゃないところから入れた
		スーパーバイズ研修	ひとり一人指されるスーパーバイズ研修だった

【5 ピクチャーズを用いた支援（表 2)】では、重要カテゴリーとして＜三障害統合の時代へ＞＜本人中心支援＞＜本人の思いに乗る＞＜問い＞＜見える化＞＜支援者の質の向上＞＜家族への支援＞＜ 5 ピクチャーズの課題＞＜共生社会に近づく＞が抽出された。

＜三障害統合の時代へ＞では、「パラダイム転換」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。

＜本人中心支援＞では、「本人を真ん中に置く」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。

＜本人の思いに乗る＞では、「本人が主人公」が重要カテゴリーとして抽出された。

＜問い＞では、「正しく問う」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。

＜見える化＞では、「わかりやすい」「伝えやすい」「ロジカル」「本人が前に出る」「ストレングス視点」「興味関心を促す」「社会資源への気づき」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。

＜支援の質の向上＞では、「人への関心」「チームでの共有」「個人の質の向上」

がサブ重要カテゴリーとして抽出された。

＜家族への支援＞では、「家族を勇気づける」が重要カテゴリーとして抽出された。

＜５ピクチャーズの課題＞では「教わることの難しさ」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。

＜共生社会に近づく＞では、「関わる人から変えていく」が重要カテゴリーとして抽出された。

表２　５ピクチャーズを用いた支援

カテゴリー	重要カテゴリー	サブ重要カテゴリー	重要アイテム
5ピクチャーズを用いた支援	三障害統合の時代へ	パラダイム転換	生きるをどうささえるかみたいなところにパラダイム転換の時代
			5ピクチャーズはパラダイムのところで出てきたツールだった
	本人中心支援	本人を真ん中に置く	本人の前でやったりすると照れくさそうにしていた
			「人」から考えると障害種別は関係なくなった
			ストレングスや社会資源は人それぞれ
			その人がやりたいことを先に考えるようになった
	本人の思いに乗る	「本人」が主人公	自分の納得したプランがプロセスの中で醸成されていく
			本人がニコッとする
			本人が身を乗り出してくる
			信頼関係ができる
			自分が巻き込まれていることを自覚するツールにもなる
			支援者と利用者の関係性を変えた
	問い	正しく問う	その人への適切な問いが対話の質を高める
			プラスアルファが引き出される
	見える化	わかりやすい	整理されている
			一目瞭然のわかりやすさ
			とっつきやすい
			一緒に見ている関係になる
			ストーンときれいに落ちた
			わかりやすさをオープンにしていくことが大事
		伝えやすい	利用者を前にキチンと胸を張って説明できた
			他の人に説明するときに言いやすくて伝えやすい
		ロジカル	根拠がある
		本人が前に出る	ボンと本人が前に出る
		ストレングス視点	当たり前のことに着目
			ストレングスシートを描くと柔らか頭になる
			些細かもしれないがその人のがんばりがよく見える
			その人のことを放っておけなくなる
			この人「いい人じゃん」に代わる
			事例検討の後、関係者じゃないけどその人に会いたくなる
			上から目線にならずに一緒にやっていきたいと思うようになる
			一緒に考えていくところが意思決定支援につながる
			困難があっても可能性を探すようになる
			利用者にたくさんの提案できるようになった
			利用者の合意が取れやすくなった
			あまりブレーキをかけない自分がいた
			リスクも一緒に考えられる
		興味関心を促す	対人援助を楽しくさせる
			みんなで作ると見える範囲が広くなる
			自分の知らない情報に出会う
			人のどこを見るかの基本的な学びにつながる
		社会資源への気づき	世の中にあるものすべてを社会資源と考えられる
			普通の社会資源を考えられる
			一般の社会資源を使うと自分もうれしい
	支援者の質の向上	「人」への関心	昨日と今日の変化がわかるのが専門家
			問題が起きた時だけのかかわりだけでは書けない
		チームでの共有	チームで共有できると互いの支援力が高まる
		個人の質の向上	自分のかかわりを見直す
	家族への支援	家族を勇気づける	支援者が書き出した息子のストレングスに家族が勇気づけられた
	5ピクチャーズの課題	「教わる」ことの難しさ	言葉で表現することが難しい人への対応
	共生社会に近づく	関わる人から変えていく	イルカ好きの子を通してトレーナーの勉強会の扉が開いた

【5 ピクチャーズの可能性(表 3)】では、重要カテゴリーとして「福祉領域での支援」「共生社会を推進する支援での活用」「一般社会での活用」が抽出された。
＜福祉領域の支援＞では、「相談支援研修」「自立生活援助での活用」「児童領域での活用」「福祉の教育」「何らかの支援を必要とする人への活用」がサブ重要カテゴリーとして抽出された。

表３　５ピクチャーズの可能性

カテゴリー	重要カテゴリー	サブ重要カテゴリー	重要アイテム
5 ピクチャーズの可能性	福祉領域での支援	相談支援研修	サビ管研修でサービス事業者のレベルアップさせたい
			プレ研修ではすでに活用している
			サービス等利用支援計画の今後の支援方針の内容が変わったらいいな
		自立生活援助での活用	軽度の人で地域でつながりながら、自分のやりたいことを見出しながら、人とつながりながらという対象者が増えてくる
		児童領域での活用	児童相談でも使っている
			不登校の子に活用した例はある
			思春期のワーッとなる子など合うんじゃないかな
		福祉の教育	福祉を勉強している人への学びにも使えそう
			障害のことを学んでいる人にも使えそう
	共生社会を推進する支援での活用	何らかの支援を必要とする人への活用	何かしら人のサポートをしている人にも使えそう
			何か課題を抱える人に寄り添うときのツールとして活用できそう
	一般社会での活用	関心がある人の学び	関心がある人への学びにも使えそう
		一般の人材育成研修	広く人材育成で使えそう

5. 結果の考察、おわりに

今回のインタビュー調査では、【5 ピクチャーズを用いた支援】のなかで＜ストレングス＞に関する重要アイテムが最も多く見られた。あらためてストレングス視点での関わりの重要性を再認識することができた。また＜共生社会に近づく＞「関わる人から変えていく」〔イルカ好きの子をとおしてトレーナーの勉強会の扉が開いた〕では、イルカのトレーナー側から“私たちも知的障害者のことを勉強しなくちゃ”という声が挙がったという。＜家族への支援＞「家族を勇気づける」〔支援者が書き出したストレングスに家族が勇気づけられた〕では、子どもへのストレングス視点での関わりが親を元気にしている様子がわかった。5 ピクチャーズを用いた支援は要支援者だけでなく周りの人たちの可能性も開いていることがわかった。＜支援者の質の向上＞「人への関心」〔昨日と今日の変化がわかるのが専門家〕をみると相談支援専門員とサービス事業者の密な連携が課題であることが再確認された。

【5 ピクチャーズの可能性】では、障害種別にとどまらず多方面に 5 ピクチャーズを用いた支援の可能性が示唆されている。特に＜福祉領域での支援＞「自立生活援助での活用」〔軽度の人で地域でつながりながら、自分のやりたいことを見出しながら、人とつながりながらという対象が増えてくる〕では、広く障害福祉の対象者への活用への可能性が示唆された。他にも＜福祉領域での支援＞のサブゴリーからは「児童領域での活用」「福祉の教育」などの可能性が、また、＜共生社会を推進する支援での活用＞のサブカテゴリーからは、「何らかの支援を必要とする人への活用」が、さらに＜一般社会での活用＞のサブカテゴリーからは「関心ある人の学び」「一般の人材育成研修」の可能性も示唆された。

今回の調査対象は障害領域であったため、結果にはまだ言及されていない領域等も含まれていることが予想される。

今後も実践に役立つ活動を進めるとともに共生社会に向けて役立つ活動に精進していきたい。

さいごになりましたが、今回はコロナ禍で制限の多い調査であったにもかかわらず多忙な中ご協力いただいた KCN の皆さんに感謝したい。

注

(1) KCN は略称。正式名称は「かながわ障がいケアジメント従事者ネットワーク」2006（平成 18）年に、神奈川県内で相談支援研修を支えてきた官民の演習講師等が中心となって、ケアマネジメント従事者の専門知識、資質の向上及び情報交換等を図ることを目的とした連絡会を発足し、相談支援力を高めるために研修活動や情報交換の場の提供といった活動を定期的に行っている。2007（平成 19 年）NPO 法人化。

(2) 事例理解をするために筆者が提唱したフレームである。ミスポジションという言葉自体は、野中（2000）『ケアマネジメントのコツ』のなかにある付録のなかで筆者が使ったのが初出。「すべての人はより良く生きたいと望んでいる」を前提とする。従来のダメージモデルが「障害」に着目することで結果的に問題を要支援者のなかに見出すのに対し、ミスポジションモデルはズレに着目することで問題を外在化し、対象者とともにその問題解決を図ることを試みる。ミスポジション論では、「できる／できない」ではなく、そのズレから生じるものを「思い」「生活ニーズ」として捉える。

(3)「問題の可視化」に焦点を置くフレームである。あるべき理想の姿と現状のギャップを可視化し、そのギャップを埋めるための方法を考えていく。小野・宮田（2018）。

(4)「ミスポジション論」をベースに筆者が考案したフレームである。「情報は時間とともに変化するが、問いは変わらない」「関わることは問い続けること」を前提に、本人を中心に置いた 5 つの問いから構成される見える化である。支援者目線を外しラ

ベルなしに「その人と出会い」「その人の思いを見失わず」「丸ごと理解」しようという立場を促す試みである。

(5) ストレングスへの気づきは、すべての人は誰でも生来的にストレングスをもっているという人間観や価値観をベースに、またかかわりのなかでの信頼関係や高度なコミュニケーション能力に裏付けられる。「地域は社会資源のオアシスである」(C. ラップ・R. ゴスチャ、2006）のように 世の中にあるすべてのものは社会資源であるという柔軟な発想のもとで、その支援の推進力となるストレングスに着目し、支援に生かすことが重要だと考える。

(6) 人により、またその時々により見えている「あるべき理想の姿」には違いがある。必ずその目的地（目標）にたどり着かねばならないというものではなく、めざす方向性として捉える。普段の生活では意識されないことも多く、ともに探すことも重要な支援だと考える。

(7) 本人中心支援として利用者の思いをとらえるために筆者が考案したツールである。主人公であるサービス利用者本人が自分の言葉で登場（表記され)、ミスポジションの思いを伝える。支援者はそれを捉え、見失わず、寄り添いながら利用者主体の支援軸を作ることを試みる。主語を本人が使う 1 人称（私は…、ぼくは…など）を用いて 100 文字程度で表記する。

(8) 5ピクチャーズでは、利用者本人にとって大事なことに焦点をあてた目標設定を行う。たとえ困難な状況であっても、見通しが開くことで現状が好転し、可能性が開くと考える。

文献

遠藤功, 2005,『見える化』 東洋経済新報社, 25, 178 － 179

小野義直・宮田匠, 2018,『ビジネスフレームワーク図鑑』翔泳社, 18-21

佐藤光正・遅塚昭彦・広沢昇, 2003,『図解障害者ケアガイドライン』 環境新聞社

佐藤光正, 2011,「ストレングス視点による支援の再評価」『精神科臨床サービス』 11 (4);537-541

障害者相談支援テキスト編集委員会, 2006,『障害者相談支援従事者初任者研修テキスト』 中央法規出版, 307-312

白澤政和, 2018,『ケアマネジメントの本質』 －生活支援のあり方と実践方法－中央法規出版社, 313